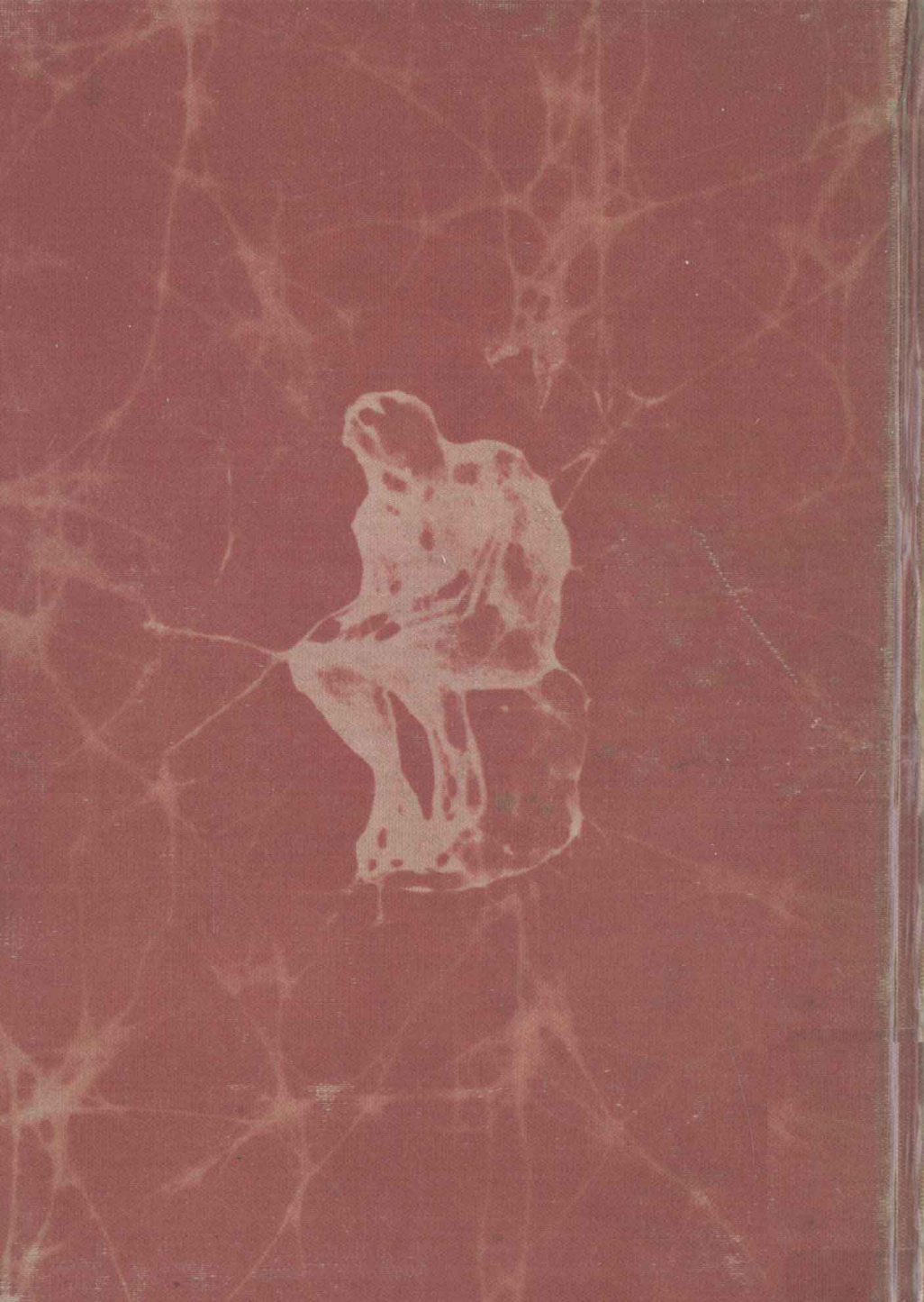

夏目漱石

瀬沼茂樹編

人生論読本　第一巻

角川書店

人生論読本 I
全12巻

夏目漱石 篇

昭和35年7月10日初版発行

編者 瀬沼茂樹
発行者 角川源義
印刷所 同興印刷株式会社
製本所 株式会社宮田製本所
発行所 株式会社角川書店
東京都千代田区富士見町二
振替 東京一九五二〇八番

定価 二六〇円

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

Ⅰ 青春の環境　七
図書館にて　七
三つの世界　一二
今の青年と昔の青年　二〇
新しい女性　二八
教師と生徒　三四
読書と文章　四二
青年の理想　四八

Ⅱ 愛と人生 六三
愛について 六三
愛の理論家 七〇
恐れない女と恐れる男 八〇
嫉妬について 八五
結婚後の女 九三
女の強さ 九八
夫婦について 一〇四
母性愛 一一二
銀婚式 一一七
青年と白髪 一二〇
Ⅲ 人間の運命 一二五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

道義について　一二五
人間存在の目的　一三〇
自然と道徳　一三五
不安について　一三八
孤独について　一四四
幸福への道　一五〇
絶対について　一五六
人情のある敵　一六二
この死この生　一六七
生と死　一七六

Ⅳ　社会と自分　一八五
仮面　一八五
権威と自己　一九〇

職業と道楽　一九五
時代と道徳　二〇四
模倣と独立　二一一
現代日本の開化　二一七
私の個人主義　二三一

夏目漱石論　伊藤整　二四八
漱石主要参考文献解題　二六六
漱石年譜　二七四
あとがき　瀬沼茂樹　二八一

表紙　佃幸野

夏目漱石

則天去私

漱石

I　青春の環境

図書館にて

次の日は空想をやめて、はいるとさっそく本を借りた。しかし借りそくなったので、すぐ返した。あとから借りた本はむずかしすぎて読めなかったから、また返した。三四郎はこういうふうにして毎日本を八、九冊ずつは必ず借りた。もっともたまには少し読んだのもある。三四郎が驚いたのは、どんな本を借りても、きっとだれか一度は目を通しているという事実を発見したときであった。それは書中ここかしこに見える鉛筆の跡で確かである。あるとき、三四郎は念のため、アフラ＝ベーン[一]という作家の小説を借りて見た。あけるまでは、よもやと思ったが、見る

一　アフラ＝ベーン　イギリス最初の職業的な女流作家。一七世紀時代の人。ディフォと比較される。その作『オルノーコ』のことは、『三四郎』の中に出ている。

とやはり鉛筆で丁寧にしるしがつけてあった。このとき三四郎は、これはとうていやりきれないと思った。ところへ、窓の外を楽隊が通ったんで、つい散歩に出る気になって、通りへ出て、とうとう青木堂へはいった。

*

三四郎はじっとその横顔をながめていたが、突然コップにある葡萄酒を飲み干して、表へ飛び出した。そうして図書館に帰った。

その日は葡萄酒の景気と、一種の精神作用とで、例になくおもしろい勉強ができたので、三四郎は大いにうれしく思った。二時間ほど読書三昧にはいったあと、ようやく気がついて、そろそろ帰るしたくをしながら、いっしょに借りた書物のうち、まだあけて見なかった、最後の一冊をなにげなく引っぺがして見ると、本の見返しのあいた所に、乱暴にも、鉛筆でいっぱい何か書いてある。

「ヘーゲルのベルリン大学に哲学を講じたるとき、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。かれの講義は真を説くの講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。真と人と合して醇化一致せるとき、その説くところ、言うところは、講義のための講義にあ

二 読書三昧　三昧とは仏語から出たことばで、心を集注して余念のないこと。一心不乱に本を読みふけること。

三 ヘーゲル　一九世紀のドイツの哲学者ゲオルグ＝フリードリッヒ＝ウィルヘルム＝ヘーゲル。カント以来のドイツの大哲学者。一八一八年招かれてベルリン大学の教授となり、一世を支配した。一八三一年、コレラのために急逝。

四 毫も　すこしも。

五 醇化一致　無用のものをふるいにかけて、ひとつのものにまとめあげる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

らずして、道のための講義となる。哲学の講義はここに至ってはじめて聞くべし。いたずらに真を舌頭[六]に転ずるものは、死したる墨をもって、死したる紙の上に、むなしき筆記を残すにすぎず。何の意義かこれあらん。……余今試験のため、すなわちパンのために、恨みをのみ涙をのんでこの書を読む。岑々[七]たる頭を押さえて未来永劫に試験制度を呪詛することを記憶せよ」

とある。署名はむろんない。三四郎はおぼえず微笑した。けれどもどこか啓発[八]されたような気がした。哲学ばかりじゃない、文学もこのとおりだろうと考えながら、ページをはぐると、まだある。「ヘーゲルの……」よほどヘーゲルの好きな男と見える。

「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方よりベルリンに集まれる学生は、この講義を衣食の資に利用せんと、の野心をもって集まれるにあらず。ただ哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の真を伝うると聞いて、向上求道[九]の念に切なるがため、壇下に、わが不穏底[一〇]の疑義を解釈せんと欲したる清浄心[一一]の発現にほかならず。このゆえにかれらはヘーゲルを聞いて、かれらの未来を決定[一二]しえたり。自己の運命を改造しえたり。[一三]のっぺらぼうに講義を聞いて、のっぺらぼうに卒業し去る君ら日本の大学生と同じことを思うは、天下の己惚[一四]なり。君らはタイ

六　舌頭に転ずる　しゃべりちらす。

七　岑々　もだえ苦しむこと。頭が痛いこと。

八　啓発　知能をひらきおこすこと。おしえられること。

九　求道　仏教用語で、安心立命の正道を求める意味。真理をもとめる。

一〇　不穏底　心の底からおだやかでないこと。

一一　清浄心　仏語。妄念を去った清い心。

一二　決定　疑いなくきめること。

一三　のっぺらぼう　目、鼻、口などのない化け物のこと。思慮分別がなく、ぼっとしていることをいう。

プ・ライターにすぎず。しかも欲ばったるタイプ・ライターなり。君らのなすところ、思うところ、言うところ、ついに切実なる社会の活気運に関せず。死に至るまでのっぺらぼうなるかな。死に至るまでのっぺらぼうなるかな」

と、のっぺらぼうを二へんくり返している。三四郎は黙然として考え込んでいた。すると、後からちょっと肩をたたいた者がある。例の与次郎であった。与次郎を図書館で見かけるのは珍しい。かれは講義はだめだが、図書館はたいせつだと主張する男である。（『三四郎』から）

学問とは何か

漱石の青春小説『三四郎』の一部である。小川三四郎は熊本の旧制高校を終えて東大にはいり、はじめて大学の講義を聞いた。同級生の佐々木与次郎と知り会ったが、「大学の講義はつまらんなあ」「生きてる頭を死んだ講義で封じ込めちゃ、助からない」などという批評を聞いた。やがてこの与次郎から「これから先は図書館でなくっちゃ物足りない」と教えられ、はじめて図書館にはいることを覚える。三四郎が本の見返しに書いてある落書きを読んで、思わず微笑する。学問とは何かについて教えられるような気がしたからである。

この落書きに書いてある哲学に対する考え方、一般的にいって学問論、教師論は後に抜萃（ばっすい）する『愚見数則』その他に現われている漱石の持論であることは説明するまでもなかろう。このころ漱石はヘーゲルのベルリン大学での開講のありさまを知って（明治四〇年三月二三日づけ野上豊一郎あて手紙）、ヘーゲルの実例をもって、自分の考えを敷衍（ふえん）して見せたものであり、東大の教師であった漱石自身もこうい

う覚悟で講義をしていた。漱石はこのヘーゲルに見るような良心的な学者であり、それだけ謹厳で、学生にもきびしかった。こんな話がある。

ある学生が薩摩絣の袷の上に羊羹色の紋付の羽織を着て、もしゃもしゃに無精髭をはやして、山賊のようなかっこうで講義を聞いていた。この学生は無作法にも片手をふところ手をして、袖口から出さない。しかもいつもニヤニヤして、漱石の顔と自分のノートとを見ている。漱石は「無礼な奴だ」と思っていたようだが、ついに急に講義をやめると、「君、手を出したまえ」と、癇癪玉を破裂させた。みんなはびっくりしてペンをとめて、その学生のほうを見た。その男はあいかわらずニヤニヤしていて、いっこうに手を出す様子もない。漱石はますます癇にさわって、「君、手を出したまえ」と言ったが、依然として手を出さない。他の学生は肝っ玉のすわった学生だと感心していた。漱石は額に青筋を出したまま、何と思ったか講義を続け、ついに講義を終わった。終わってから、学生をしかるつもりで、そばに近づいた。すると、ひとりの学生が、「××君は少年時代に負傷して片手を失ったのです。どうか失礼をお許しください」とあやまった。漱石は黙って教室を出て行った。

これは当時学生であった金子健二の『人間漱石』に出ている一九〇四年一二月一日の日記の一節である。この話はこれで終わっているが、漱石の逸話として伝わっているところによると、ここで漱石は、「ぼくはない知恵を出して講義しているのだから、君もない手を出して聞きたまえ」といったという。この話のもととなった実話であろう。漱石らしいユーモアのある話になっているわけであるが、すこしうまくできすぎている。金子の日記のほうが実話であろう。それにしても漱石の半面の姿を伝えていないわけではない。

こんなに癇癖の強い、やかましかった先生であるが、その身辺に多くの学生が集まり、漱石に心服したのはどうしたわけであろうか。漱石の教師としての態度、「心の講義」「道のための講義」であったか

ら、学生もまた、衣食のためではなく、道を求めて、襟を正して聞こうとする学生だちがおのずから集まり、漱石に近づいていったのである。

三つの世界

——青春と現実——

三四郎には三つの世界ができた。一つは遠くにある。与次郎のいわゆる明治十五年以前の香がする。すべてが平穏であるかわりにすべてが寝ぼけている。もっとも帰るに世話はいらない。もどろうとすれば、すぐにもどれる。ただいざとならない以上はもどる気がしない。いわば立ちのき場のようなものである。三四郎は脱ぎ捨てた過去を、この立ちのき場の中へ封じ込めた。なつかしい母さえここに葬ったかと思うと、急にもったいなくなる。そこで手紙が来たときだけは、しばらくこの世界に徒徊して旧欄を暖める。

第二の世界のうちには、苔のはえた煉瓦造りがある。片すみから片すみを見渡すと、向こうの人の顔がよくわからないほどに広い閲覧室があ

一 一つは遠くにある　遠い故郷を意味する。

二 徒徊　ぶらぶらとさまようこと。

三 旧欄を暖める　昔の楽しさをよみがえらせて味わう。

四 苔のはえた煉瓦造り　図書館の建物をさす。つまり第二の世界とは、学問の世界を意味する。

る。はしごを掛けなければ、手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手ずれ、指のあか、で黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それからすべての上に積もったちりがある。このちりは二、三十年かかってようやく積もった尊いちりである。静かな月日に打ち勝つほどの静かなちりである。

第二の世界にうごく人の影を見ると、たいてい不精な髭をはやしている。あるものは空を見て歩いている。あるものは、うつむいて歩いている。服装は必ずきたない。暮らしはきっと貧乏である。そうして晏如としている。電車に取り巻かれながら、太平の空気を、通天に呼吸してはばからない。この中にはいるものは、現世を知らないから不幸で、火宅をのがれるから幸いである。広田先生はこの内にいる。野々宮君もこの内にいる。三四郎はこの内の空気をほぼ解しえた所にいる。出れば出られる。しかしせっかく解しかけた趣味を思い切って捨てるのも残念だ。

第三の世界は燦として春のごとく盪いている。電燈がある。銀匙がある。歓声がある。笑語がある。あわ立つシャンパンの杯がある。そうしてすべての上の冠として美い女性がある。三四郎はその女性のひとりに口をきいた。ひとりを二へん見た。この世界は三四郎にとって最も深厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づきがたい。近づきが

○俗世を超越して生きるものは、その快楽を知らぬから不幸で、その煩悩をのがれるから幸いだ。

五　羊皮、牛皮　本の皮革装丁のことで、羊皮製の書物、牛皮装の書物。

六　晏如　安らかなさま。のほほん。

七　通天に呼吸して　通天とは通天橋通天冠などのように高く空にかかっているさまをいう。何物にもこだわらず、大空に向かってのびのびと呼吸しての意。

八　火宅　煩悩が盛んなこの俗世間を火災にあった家屋にたとえていう仏教用語。「法華経」に「三界無レ安、猶如二火宅一」とある。

九　冠　首位。第一。

たい点において、天外[一]のいなずまと一般である。三四郎は遠くからこの世界をながめて、不思議に思う。自分がこの世界のどこかへはいらなければ、その世界のどこかに欠陥ができるような気がする。自分はこの世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい。それにもかかわらず、円満の発達を冀(こいねが)うべきはずのこの世界がかえってみずからを束縛して、自分が自由に出入りすべき通路をふさいでいる。三四郎にはこれが不思議であった。

三四郎は床の中で、この三つの世界を並べて、互に比較してみた。次にこの三つの世界をかきまぜて、その中から一つの結果を得た。——要するに、国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるに越したことはない。

結果はすこぶる平凡である。けれどもこの結果に到着する前にいろいろ考えたのだから、思索の労力を打算して、結論の価値を上下しやすい思索家自身から見ると、それほど平凡ではなかった。

ただこうすると、広い第三の世界を眇(びょう)たる一箇の細君で代表させることになる。美しい女性はたくさんある。美しい女性[三]を翻訳するといろいろになる。——三四郎は広田先生にならって、翻訳という字を使ってみた。——いやしくも人格上のことばに翻訳のできる限りは、その翻訳か

○ 青年にとって、けんらんたる現実は美しい女性によって代表される。

○ 青年は、青春の主人公であるとともに囚人でもある。

一 天外　天の外。つまり、きわめて高い所。

二 眇たる　きわめて小さな。

三 美しい女性を翻訳すると　広田先生が三四郎に「自然を翻訳すると、崇高とか偉大とか、みな人格上のことばになる。このように翻訳することによって感化を受ける」と言った。そのことを受けている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com